

聖書：コリント人への手紙第一 6：1～7

説教題：あなたがたの敗北

日時：2022年5月8日（朝拝）

今日の箇所にはコリント教会のメンバーが互いに告訴し合っていたことが述べられています。彼らは互いの間に生じた問題を解決するために、この世の法廷に相手を連れて行くということをやっていたようです。突然新しいテーマが出て来たかとも思いますが、これは前回最後の部分とつながっています。5章12～13節では教会は外部の人たちをさばくことはしないが、内部の人たちをさばくべきであると言われました。5章で扱われたのはいわゆる教会戒規の問題で、父の妻を妻にしている教会員を放置せず、その人が悔い改めて主の日に救われるためにも、また教会にその悪が増え拡がらないためにも、除名せよ！と言われました。教会は外部の人をさばくことはしませんし、その権限もありませんが、内部の自分たちのことについてはしっかり関心を持って対処し、主の御心にかなう教会が建て上げられるようにしなければならないと言われました。とするなら教会の仲間同士の争いが起きた場合、どうすべきでしょう。当然、内部のことは内部でさばくべきです。ところがコリント人たちは何と外部に訴えていました。これは前回見た原則から外れることになります。

何が問題だったのでしょう。1節に「仲間と争いを起こしたら」とありますから、これはコリント教会の兄弟姉妹の争いだったことが分かります。また2節に「ごく小さな事件」と言われ、3節と4節では「日常の事柄」と言われています。ですから毎日の生活の中で起こって来る日常的なこと、ある意味で些細なことと言えます。また7節には「不正な行い」とか「だまし取る」という言葉が出て来ます。とすると、日常起こることだまし取ると表現されるようなことですから、彼らの持ち物に関する事柄、所有物や財産に関わる事柄、あるいは彼らの権利や名誉に関する事柄だったのだろうと想像されます。これまで見て来た通り、コリントは当時のギリシャ文化のただ中にあり、商業で栄えた大都市でした。その町のクリスチャンたちには知識や知恵、雄弁術を誇る人たちが多かったようですし、この世の地位、名声、豊かさを求めるエリート志向の人たちが多かったようです。そんな彼らは救われる前もそうだったのか、日常のことですぐに権利を主張し合い、些細なことでトラブルになっては訴え合うということをやっていたようです。教会の兄弟姉妹との関係のことも裁判を通して争い合い、自分の権利を守り、自分を高く上げることに躍起になっていた。それは一見、

裁判という正当な手続きを経ていることのように見えるかもしれませんが。しかしパウロはそれは「不正な行い」だと言っています。また実質、相手から「だまし取る」ことだと言っています。

まずパウロが問題にしているのは、1節にある通り、聖徒たちに訴えずに、あえて正しくない人たちに訴えていたことです。この「正しくない人たち」とは「聖徒たち」と対比されていますので、聖徒ではない人たちを指すと考えられます。そして6節では「信者でない人たち」と言い換えられています。教会外の人々をこのように呼ぶのはひどいではないかと思われるかもしれませんが、これは神の前に義と認められているか否かということです。すべての人は神の前に罪人ですが、イエス・キリストにより頼む者はその十字架を通して義と認められると聖書は述べています。次回見る11節の最後にコリント人たちを指して、あなたがたは「義と認められたのです」と言われます。ですからそうでない人たちは神の前に「正しくない人たち」ということになります。

そしてここでのパウロのポイントは、その人々を揶揄することにあるのではなく、どうしてそういう人々に訴えるのかとコリント人たちを非難することにあります。一言で言えば、どうして価値観の違う人たちにさばいてもらおうとするのかということです。パウロは内部のことは内部でさばくべきと言いました。それは内側にいる人たちの問題は内側にいる人たちこそが持っている基準で考えられ、解決されるべきだからです。クリスチャンはこの世の人々と大きく異なる世界観を持っています。福音を知り、主イエス様を知り、主に従ってどう歩むべきか、世と異なる倫理を持っています。その価値観の下で兄弟姉妹同士のこととは考えられ、解決されるべきです。なのになぜ外部の人たち、主の前に正しいとされていない人々に、解決の手助けを求めるのか。それは自分たちの基準を投げ捨てて、この世の基準・この世の価値観でさばいてもらうことを意味します。またそれで勝った人が教会の中で力を持つなら、教会は益々この世の価値観が幅を利かせるところとなってしまいます。

2～4節でパウロは、聖徒たちは将来どうなるのか、その光の下で今の振る舞いを考えるようにと導きます。まず2節で「聖徒たちが世界をさばくようになることを、あなたがたは知らないのですか」と言います。やがてのさばきの日、クリスチャンは主と結ばれている者たちとして、主のさばきにあずかること、その王権にあずかること

が聖書の他の箇所でも言われています。ヨハネの黙示録 2 章 26 節：「勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。」 同 3 章 21 節：「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる。」 テモテへの手紙 第二 2 章 11～12 節：「私たちが、キリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きるようになる。耐え忍んでいるなら、キリストとともに王となる。」 このようにやがての日、聖徒たちは主にあって世界をさばく者となるのに、そのあなたがたが今どうしてごく小さな事件さえもさばけないのか。そのようなことは当然主の基準に従ってさばくことができる者でなければならないのではないかとパウロは言います。3 節も同じです。そこでは御使いたちをもさばくようになると言われています。全世界には御使いも含まれるということでしょう。そのような地位に上げられるあなたがたは、当然日常の事柄はさばけて然るべきではないか。4 節：「それなのに、日常の事柄で争いが起こると、教会の中で軽んじられている人たちを裁判官に選ぶのですか。」 前後関係から判断しますと、「教会の中で軽んじられている人たち」とは教会外の人たちを指します。教会で重んじられているわけではない人たちです。もちろんクリスチャンはこの世の法廷に一切訴え出るべきではないということではありません。パウロもローマ皇帝カエサルに訴えたことがありました。またローマ人への手紙 13 章には、この世の立てられた権威には、この世の社会的悪を抑制し、善を促進するという神の御心があるとされています。ですからその適切な使い方というものはもちろんあります。しかし今日の箇所で取り上げられているのはクリスチャン同士の日常の事柄です。それはクリスチャン同士の間で、互いに共通に持っている神の国の価値基準で解決されるべきです。

5 節では「私は、あなたがたを恥じ入らせるために、こう言っているのです」と前置きして、「あなたがたの中には、兄弟の間を仲裁することができる賢い人が、一人もいないのですか」と問います。コリント人たちは自分たちは知識を持ち、知恵を持ち、賢い者たちであると誇っていました。そんな彼らにとって、パウロの言葉は大いなる皮肉です。あなたがたは賢いはずではなかったのですか。なのにこの種のことをさばける人は一人もいないのですかと。あるいはクリスチャンは神の知恵を知っている者たちとして真の意味で賢い者であるはずです。なのにその知恵を持っている人は一人もいないのですかという問いかけでもあります。「それで兄弟が兄弟を告訴し、しかも、それを信者でない人たちの前でするのですか」とパウロは 6 節で言います。

果たしてこの問題をどう考えるべきかが7～11節に語られます。今日は分量の関係で7節までとしますが、7節だけでも重要なメッセージが語られていると思います。まずパウロは7節前半で「そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です」と言います。彼らは訴訟を起こして勝つかも知れません。相手を思う通りにやっつけることができるかも知れません。しかしそれは敗北だとパウロは言います。いや互いに訴え合うこと、その時点で敗北である。どういうことでしょうか。それはクリスチャンとしての生き方において失敗しているということでしょうか。本来行くべき道から大きく逸脱している。特に愛の原則に反するということでしょうか。議論で兄弟姉妹に勝っても、それで相手をつぶしたら何の良いことがあるのでしょうか。自分の利益確保のために血眼になって、相手を滅ぼすようなことをしたら何の良いことがあるのでしょうか。またそういう姿を外部にさらすことによって教会に不名誉をもたらしてしまいます。このようなことでもめている様子を見る教会外の人、教会でもあんなことで争っているのだ、教会にもあのような憎しみ合いがあるのだと語り合うようになるでしょう。これでは神の顔に泥を塗っているのと同じです。クリスチャンは神に感謝し、神の栄光のために生きるべきなのに、その反対のことをやっているということにおいて敗北です。そしてそのような教会は宣教に力がなくなります。そんな教会に誰が加わりたいと思うでしょう。

パウロは7節後半で言います。「どうして、むしろ不正な行いを甘んじて受けないのでですか。どうして、むしろ、だまし取られるままでいいのですか。」 私たちはこれを聞いて、え？と耳を疑うかも知れません。不正な行いを許さないために裁判するのではないのか。だまし取られないために裁判するのではないのか。パウロはまさか不正な行いを甘んじて受けるようにと勧めているのか。だまし取られるままでいいと言っているのかと。しかしこの言葉を見つめる時、私たちの頭に思い浮かんで来ることがあると思います。それはイエス様の言葉であり、またイエス様のお姿ではないでしょうか。イエス様はマタイの福音書5章39～41節で「わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい。あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着も取らせなさい。あなたに一ミリオン行くように強いる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。」と言われました。これはまさに不正を甘んじて受ける生き方であり、だまし取られることを良しとする生き方です。イエス様はやられたらやり返せとか、やられる前に相手を倒して自分を守れ！とは言いませんでした。むしろ「自分の敵を愛し、自分を迫害する者

のために祈りなさい」と言われ、十字架上でご自分がその通り、敵の祝福のために祈られました。そして言わばされるがままの道を進み、最後にはご自分のいのちさえも差し出されました。このようにイエス様はこの世から見れば「負けた」者の道を進まれました。ところがイエス様はこのことによって私たちのための救いを勝ち取り、勝利される方となりました。私たちのために負ける道を行くことによって真の勝利を得る方となりました。これがイエス様が示された道です。パウロはこの7節の言葉によってコリント人たちに、このイエス様の姿をもう一度よく見つめるように！と促していたのではないのでしょうか。

こう述べるパウロも同じ道を歩んでいました。すでに見た4章9～13節にそのことが示されていました。使徒たちは死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出され、キリストのために愚かな者、弱い者、卑しめられる者の道を進んでいました。ののしられ、迫害され、中傷されては優しい言葉をかけ、この世の屑、あらゆるもののかすとなったと言っていました。自分たちの権利を主張することに重きを置くなら、こんな生き方をする必要は彼らにありませんでした。しかし彼らはイエス様に倣って他者の救いと益のために進んで自らが犠牲を払う道を進んでいました。ですからパウロは後の9章22節でこう言います。「弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。」自分の権利、自分の祝福、自分の幸せだけを追求するなら、こんなことをする必要はありません。しかし相手の救いを優先して願うがゆえに、また相手の益を優先して願うがゆえに、キリストがしてくださったように自らも愛を優先して、自分の権利は後ろに置く道を選び取って行く。13章の「愛の章」においてもそうです。13章4～7節に「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず」とあり、「すべてを耐え、・・・すべてを忍びます」と続きます。これ主を知るクリスチャンが行くべき道であり、イエス様と同じ真の勝利へと至る道であるということです。

私たちの歩みはどうでしょうか。今なお罪を持つ私たちが集まる教会生活、信仰生活にも、ある種の争いごとが生じるのは避けられません。その時、私たちはどうするのか。相手に負けられないと考えて互いに訴え合い、議論や自分の立場を使って相手に勝つことを目指すのでしょうか。そのために多くのエネルギーを費やして私たちは

相手に勝てるかもしれませんが。しかしそれは敗北であると言われていました。また教会皆がそのように歩んで誰も止めないなら、それはあなたがた教会全体の敗北である！とパウロは言っています。結局問われているのは、この手紙ですっと強調されて来たように、私たちは十字架につけられたキリストを本当に誇りとしているのだろうかということでしょう。私たちは世と一緒にあって十字架を蔑み、なるべくそれとは関わりたくないと考え、栄光だけを求めているのか。それとも私たちのためにご自分の権利を後ろに捨て、無となり、十字架の死という犠牲を通して私たちに救いをもたらしてくださったキリストに感謝し、この方こそを誇りとする歩みに進もうとしているのでしょうか。もし私たちが本当に十字架につけられたキリストに感謝し、この方を自分の誇りとするなら、私たち自身もこの方に倣う歩みへ進もうとするでしょう。たとえ個人的に犠牲を払うことがあっても、それが相手の救いにつながるなら、兄弟姉妹の益につながるなら、神と教会の栄光につながるなら、進んで不正をも甘んじて受ける歩み、だまし取られる歩み、負けた者と見なされる歩みを選び取るでしょう。世はこのような生き方を理解できないかもしれませんが、教会もそれを認めないかもしれませんが。しかしこれこそ神の御前での勝利の歩みです。主はその人の歩みを喜び、かの日に「よくやった、良いしもべだ。あなたはわたしのしたことが良く分かった人だ」と大いに称賛し、祝福してくださるでしょう。この道こそを、十字架の主を見上げ、十字架の主に通ずる歩みとされたいのです。